

外務省編纂

## 『日本外交文書 昭和期Ⅲ』

昭和十二〜十六年 第一巻 外交政策・外交関係、  
第二巻 欧州政情・通商問題六一書房 二〇一四・五刊  
A5 全二二六〇頁 各七〇〇〇円

本書を含む『日本外交文書』昭和期Ⅲのシリーズは、一九三七〜一九四五年の外交文書をカバーするものであり、すでに「日中戦争」「第一次欧州大戦と日本」「太平洋戦争」の三つの特集を中心に刊行されてきた。これらの特集で収録されなかった事項を収めるのが、昭和期Ⅲ第一巻から第三巻である。本欄では、二〇一四年三月に刊行された第一巻と第二巻を取り上げる。両巻は併せて一〇二八文書に及ぶ膨大な文書を収録しているため、紙幅の関係上、ここでは各巻に収められた事項の全体像を示すこととした。より多くの読者が、本書を手取るきっかけになれば幸いである。なお、第三巻は二〇一四年一〇月に刊行されている。

まず、第一巻。「外交政策一般」では、帝国議会などにおける外務大臣の演説や答弁、その海外での反響などに関する文書が採録された。当該期における日本外交の方向性が読み取れる。

「二諸外国との外交関係」では、当時日本と諸外国との間で発生した外交案件を幅広く取り上げている。例えば、一九三七年五月、豪州首相が英帝国議会における演説で太平洋不可侵条約の必

要性を訴えたことで、関係国会議の開催を危ぶむ日本の対応などを窺い知れる。

「三ソ連邦との関係」は二つの項目で構成されている。「1日ソ交渉」は、一九三七年一月に日本が拘留したソ連船ウインペル号の乗組員釈放交渉や、在ソ日本領事館閉鎖問題（一九三七年五月〜一九三八年九月）、および北樺太利権や漁業権益へのソ連の圧迫に関する問題（一九三七年五月〜一九四一年一月）について、「2満ソ・満外蒙国境紛争」は、乾岔子島事件、張鼓峰事件、ノモンハン事件について取り上げている。

「四枢軸国との関係」では、秩父宮訪独問題、独国の旧植民地回復要求問題のほか、日独貿易協定や日満伊貿易協定をめぐる交渉、ハンガリーやオランダなどとの間で締結が模索された、文化協定をめぐる交渉に関連した文書が収められた。

続いて、第二巻。「五欧州政情」では、スペイン内乱、ドイツによるオーストリア併合とチェコスロバキア解体、イタリアによるアルバニア併合など、欧州政情の変化に対する、日本の情報収集や反応の様相を窺わせる文書が採録されている。

「六国際連盟との諸問題」は、一九三七年から、日本が国際連盟への協力を終止する一九三八年二月までの間における、日本と連盟諸機関との関係についての文書が主となる。そのほか、「付国際会議への参加協力」では、連盟諸機関以外の国際会議、例えば一九三八年六月の国際赤十字会議等に関する文書も収録されている。

「七諸外国との通商問題」では、日米通商問題、日印・日緬会

商、日蘭会商、日豪通商問題が取り上げられている。そのうち日米通商問題に関しては、対フィリピン日本綿布輸出問題を中心とした一九三七年以降の日米間での綿業協定に関する交渉、および互恵通商協定をはじめとする通商政策一般をめぐる問題に関わる文書などが採録された。なお日米通商問題の項目の最後には、「参考」として、外務省通商局作成「通商ニ関係アル一般的諸問題及日本ト英米独各国トノ間ニ於ケル特殊問題（日本経済使節団ニ対スル参考資料）」（一九三七年四月）も付されている。

既刊のシリーズとの関連性のもとで本書を読むことにより、当該期の日本外交の全体像が見えてくるだろう。（吉井文美）